

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

一声、一汗、みんなで築こう豊かなふるさと・なたうち  
 ~ものづくり、地域独立と、なたうちたんけん・はっけん・ほっとけん~

受賞者 なたうち 鉦打ふるさとづくり きようぎかい 協議会  
いしかわけんななおし  
 (石 川 県七尾市)

## 1. むらづくりの主体

- (1) ふりがな 名 称 なたうち 鉦打ふるさとづくり きようぎかい 協議会
- (2) ふりがな 所 在 地 いしかわけんななおし なかじままちにしやち 石 川 県七尾市中島町西谷内への98番地
- (3) 地区の規模 集落の集合体
- (4) 組織の性格 地縁的な集団
- (5) ふりがな 代表者の氏名 からかわ 唐川 あきふみ 明史  
 役 職 会長

## 2. 地区の概要

総人口	農業就業人口	総世帯数	総土地面積	耕地	採草放牧地	山林	
960人	122人	313戸	2,877ha	107ha	0ha	ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第I種兼業農家	第II種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
180戸	115戸 (100%)	31戸 (27%)	4戸 (4%)	97戸 (69%)	8戸 (7%)	24戸 (21%)	83戸 (72%)
地域指定状況			農業地域類型区分				
農振、森林、振興山村、過疎、 特定農山村、半島			市 町 村		当 該 地 区		
			中間農業地域		中間農業地域		

### 3. むらづくりの内容及び成果

#### (1) 地域の沿革と概要

石川県七尾市は、平成16年10月、旧七尾市、田鶴浜町、中島町、能登島町の1市3町が合併して発足した。能登半島の中央部に位置しており、七尾湾周辺に市街地が展開し、東西は山地に挟まれ、南は平野が広がっている。人口は57,900人（平成22年国勢調査）、面積は318.04km<sup>2</sup>で、64%を林野が占め、農業は水稻を主要作物とする零細農家が大勢を占めている。

鉦打（なたうち）地区は、旧中島町の北西部に位置し、七尾湾に注ぐ熊木川の中上流域に位置する10集落から構成されている。地区面積は27km<sup>2</sup>、その85%は山林が占め、耕地のほとんどは水田で約200haが主に熊木川沿いに広がっている。地区の中南部の熊木川中流域の集落は平地も広く、前面に水田、背後には丘陵地を背負う形で立地する一方、上流域の集落は狭隘な谷沿いに立地しており、農村的集落と山村集落が混在した地区である。各集落はそれぞれ立地状況や性格も異なるが、明治以降、鉦打村として行政単位を形成していたことから、集落ごとに「区」として自主的な運営を行いつつも、その枠を越えた「地区」としても活動がなされたきた。集落によって若干の差はあるが、昭和40年代までは水稻作を中心に林業、肉牛肥育、葉タバコ栽培を組み合わせた複合経営であったが、林業の衰退と農作業の機械化の進展等を背景に、現在では兼業水稻経営が大宗を占めている。



#### (2) むらづくりの動機、背景

昭和30年代まで林業を中心に栄えた鉦打地区は、輸入材の増加などによる国産材の需要の減少に伴う林業の衰退によって若者を中心に集落を離れる人が増え、昭和40年代後半から徐々に過疎化が進んできた。その

後も、七尾市中心部から20km程度離れ、公共交通機関もないことなどから人口流出は進行し、一部の集落はいわゆる限界集落が目の前まで迫っていた。このような中、将来の農業継続や地域の活力低下に危機感を覚える地元有志らが集まり、地域づくりに関する様々な協議をする場を設けることとした。

### 【第1段階：基礎的な集落環境整備の実施】

昭和56年、町会長、生産組合長などの有志らが集まり、地域づくりに関する様々な協議をする場として、「鉦打むらづくり推進会議」を設け、住民参加と合意の下、簡易なほ場整備やミニライスセンターの建設、集会所の整備等を実施した。

これらの生産基盤や生活環境の整備は着実に成果を挙げる一方で、地区内10集落はその規模が5～70戸とばらつきがある中、集落間での対立や取組の停滞などがみられるようになった。当初は大きな集落からの会長選出が慣例であった中、集落の規模にかかわらず、意欲の高い者を会長が選ぶようにするなどテコ入れを図ったものの、直面する課題に対応することが困難になっていった。

### 【第2段階：地域資源の発掘と祭りの復活を通じた地域の結束】

平成4年、「10集落はひとつ」を掲げ、従来の「鉦打むらづくり推進会議」の構成員に加え、新たに商工会や在京鉦打郷友会等をメンバーに加えて「鉦打ふるさとづくり協議会」として改組、再スタートを切ることとなった。

活動再開に当たって、改めて地域資源を見つめ直したところ、『県外を含む多数の人が訪れる湧水（藤瀬の霊水：病に効くという言い伝えがあり、環境省「名水百選」の一つ。）を地域おこしの核とすべき。』との声があがり、地域住民総出の度重なる話合いや外部の有識者を招いたシンポジウムの開催を経て、「やすらぎの水とササユリの里構想」を練り、訪問客の苦情となっていた「じゃり道で道幅が狭く、駐車場もない。」に応える形で藤瀬霊水公園を整備するとともに、農産物直売所や荒廃した棚田をふるさと農園として整備してオーナー募集等に動き出すこととなった。

藤瀬霊水公園の整備、農産物直売所やふるさと農園の開園により、協議会と地区住民は「むらづくり」への確実な手ごたえと大きな自信を得た。これを契機に、開催が途切れがちだった集落対抗の演芸大会である「郷土芸能祭」に加え、農産物の品評会や即売会等を内容とする「鉦打茶

屋まつり」が新設されて交互に定期的に開催されるようになると、集落間の結びつきが強まった。さらに、他県のむらづくりの先進地視察や、地区住民・中高生に対するアンケートの実施などを通じ、「鉦打に住みたい、住んでよかったと思えるふるさとづくり」を住民みんなで考え、実践していこうとする機運がさらに高まった。

### 【第3段階：外部の視点と知恵を活かした新たな展開】

しかしながら、生業である農業による所得の向上や、高齢化が進展する中での地域リーダーとなる人材の育成といった解決すべき課題は多く残っていた。このような状況を打開するため、平成20年から5年間にわたり、旧中島町史の編さんをきっかけに交流を持つようになった金沢大学地域連携推進センター等の先生方を招いた勉強会を開催するとともに、金沢大学のほか首都圏の大学からのインターンシップを積極的に受け入れることにより、いわば「ヨソモノ」の視点と知恵を借り、これまで埋もれていた地域資源に「気づき」、むらづくりのノウハウに一層の磨きをかけた。

<気づきの例>

- ・「広い田舎の家の縁側を利用した喫茶を始めれば面白いのに。」  
→ 具体化させるべく平成26年度事業の実施を計画中。
- ・「集会に参加したお父さんは自宅に帰ってから、家族に報告しない。話をしていればもっとより良い地域づくりができるはず。」
- ・「地区の5つのお寺をオープンガーデンとしてどうか。」

このように地域外からの助言を受け入れつつ、鉦打米のブランド化を進めるとともに、能登野菜（古くから能登地方で栽培されている伝統野菜など）である中島菜や金糸瓜の規格外品を活用した漬物開発、地場大豆を用いた田舎味噌などの特産品づくりにも取り組み、所得向上と雇用創出の場（鉦打米の販売作業や漬物原料の調達・加工等）を確保したほか、夏祭り（キリコ祭）や秋祭り（杵旗祭）、稲刈り等の農作業体験などによる都市住民との交流も行うようになった。

さらに、26年度中には、大区画のためのほ場整備事業の着手や農地中間管理機構の創設を契機に、水稻生産の効率化等を図るため、農業生産法人を設立することとしている。

## （3）むらづくりの推進体制

### ア 組織の体制、構成の状況

「鉦打ふるさとづくり協議会」（以下、「協議会」という。）は、「鉦打

地区町会連合会」、「鉦打地区女性会」等の地域住民団体、「(農)上畠農業機械利用組合」等の農業団体、商工会、在京鉦打郷友会など11団体、地区内の個人（市議会議員等）から構成され、役員は、会長1名、副会長2名、監査委員2名、委員19名の合計24名（うち女性4名）である。また、専門的な課題について、多くの住民の参画を得て検討を深めるため、「生産環境部会」及び「生活環境部会」を設置している。

## イ 主要の構成団体の取組概要

### 鉦打地区町会連合会

10集落（別所、河内、西谷内、古江、藤瀬、鳥越、大平、町屋、上畠、北免田）の町内会長を中心に、伝統的行事や防災活動の実施とともに、各集落の住民に対する連絡調整を実施。

### 鉦打地区公民館

地区住民のコミュニティ活動や社会教育活動を実施。

### 鉦打地区女性会

地区の女性92名により、学習活動やボランティア活動、各種イベントを実施。

### 鉦打地区壮年団協議会

地区の青壮年男性64名により、学習活動やボランティア活動、各種イベントを実施。

### 在京鉦打郷友会

265名の首都圏内の鉦打地区出身者により構成される団体で、会員の親睦とふるさと支援を実施。

### NPO法人なたうち福祉会

協議会の役員11名が構成員となり、小規模多機能型介護施設を運営するとともに、高齢者の生活支援活動である買い物代行サービス、直売所への農産物搬入サービス（今年度から実施予定）、安否確認などを実施。

### 藤瀬霊水公園管理組合

藤瀬霊水公園の施設の管理、直売所の運営、ふるさと農園の管理を実施。（組合員数：85名）

### 上畠（うわばたけ）機械利用組合

構成員16戸により、経営耕地25ha（地区内15ha）の水田経営等を行う集落営農組織。

### 西谷内アグリ

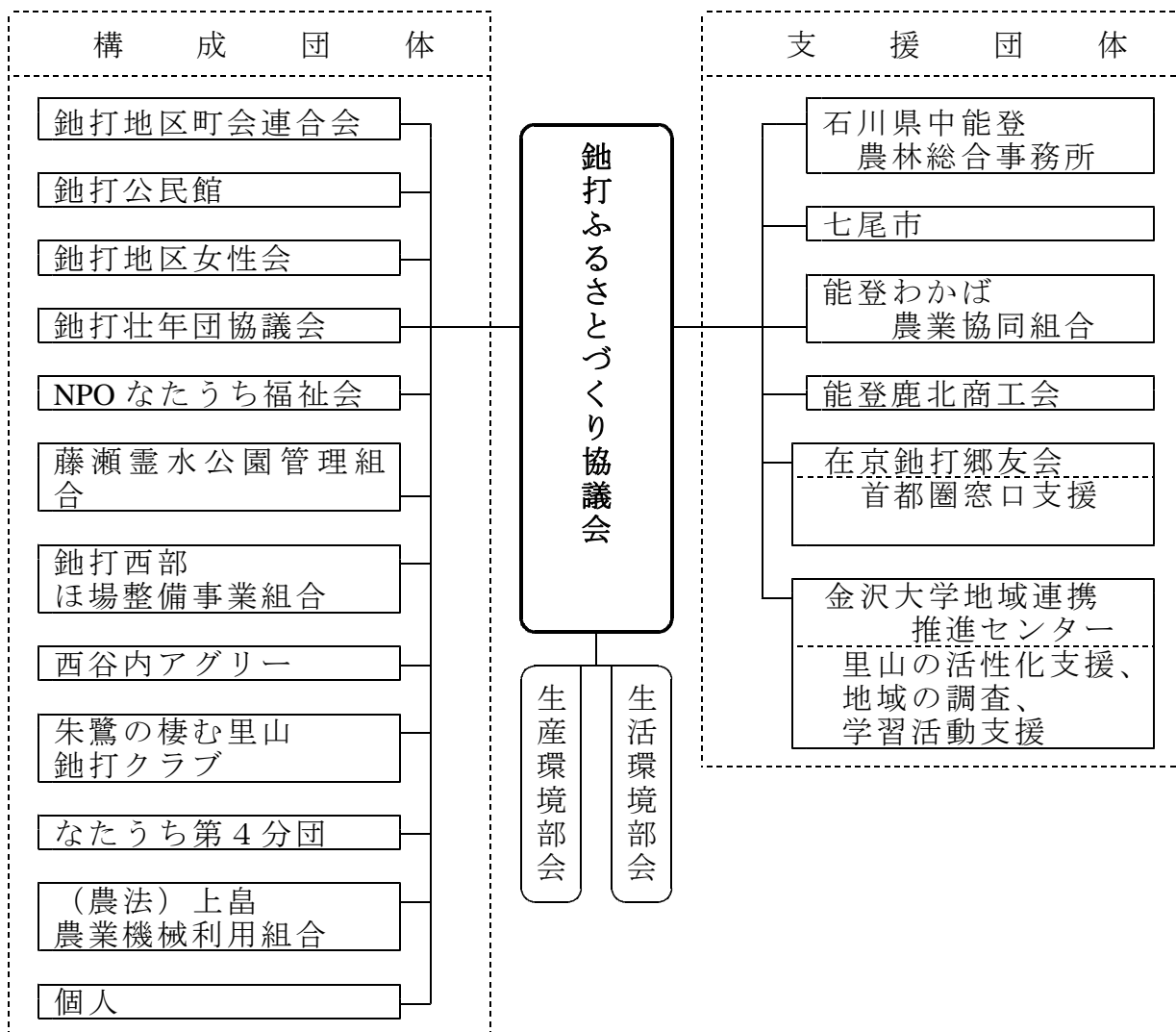
小麦やぶどうなどの新規作物の試験栽培を行う有志約30名の組織で

あり、中山間地域等直接支払制度の事務局も担う。

### 朱鷺の棲む里山鉦打クラブ

地区内外の住民約40名で構成される、朱鷺を再び鉦打到に生息できる環境づくりを目的とした組織。

鉦打ふるさとづくり協議会組織体制図



#### (4) むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

昭和40年度以降のほ場整備事業の実施により、地区内の200haで基盤整備が完了している。うち134haが中山間直接支払制度の対象農地であり、地区総出の法面除草や用水補修等へ交付金が活用され、生産基盤の維持とともに、美しい能登の里山の景観が保たれている。また、鉦打地区にはかつて朱鷺が飛来していたことから、再び朱鷺が飛来する環境づくりを目指し、環境保全型農業の推進や一部集落ではビオトープの設置などにも取り組んでいる。これらの取組みは、平成23年の能登地域の世界農

業遺産登録にもつながっている。

さらに、25年度から30年度まで、地区西部の60haで大区画化のためのほ場整備が実施され、より効率的な経営ができる生産基盤が整うこととなる。

## ア 「能登の里山」資源を活かした特産品の開発

### 【鉦打米】

虫ヶ峰や別所岳の源流を用水として田に引き入れ、昔ながらの天日による「ハザ干し」を今なお続け、地域ぐるみでおいしい米づくりに取り組んでいる。地元の国民宿舎「小牧台」や在京鉦打郷友会のメンバー等に販売している。



### 【能登野菜の栽培】

今日、能登野菜として指定されている中島菜、小菊かぼちゃ、金糸瓜（きんしうり）は昭和40年代頃からこの地で先駆的に栽培が始められた。特に、中島菜については元来2月に積雪をかき分けて収穫する冬季の食材だったが、県農業試験場の協力を得て当地での採種技術の安定と栽培技術の確立、さらに機能性（血圧上昇抑制効果）の発見等によって加工用途への利用の広がりから大きく産地化されてきた。また、小菊かぼちゃは、鉦打の先駆的農家によって果皮の着色を良くするためのパイプハウス利用による立体栽培にいち早く取り組んでいる。



### 【女性の参画を得た加工品の開発・販売】

平成8年に、農業所得の拡大と市場出荷の規格外品等の有効活用を目的として、加工処理施設を整備し、地区内の女性加工グループ「みつば会」と「七草会」が「中島菜漬」、「金糸瓜の粕漬」、「おばば味噌」などを製造している。（財）いしかわ農業人材機構の指導を得つつ開発した商品は、主に道の駅や藤瀬霊水公園内直売所、県内外のイベントや在京鉦打郷友会を通じて販売している。

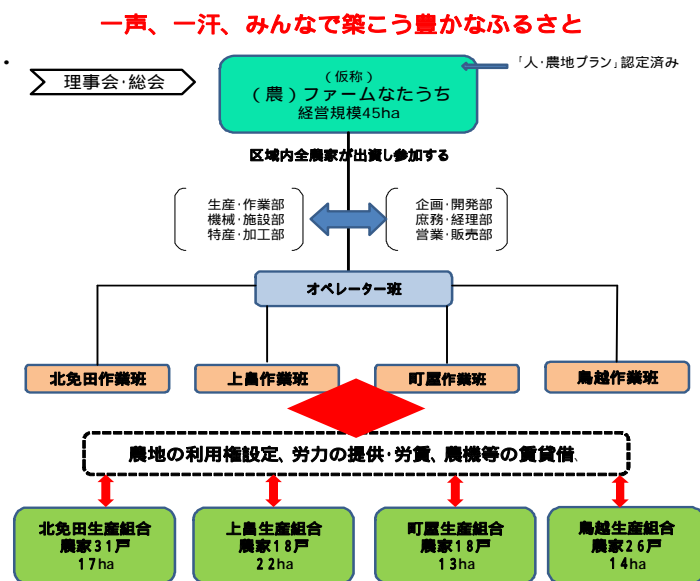


## イ 集落営農による効率的な農業経営

昭和53年に発足した農協の農作業受託組織を前身とする農事組合法人「上畠（うわばたけ）農業機械利用組合」は、利用権を設定した非農家も取り込みながら、現在、構成員16戸、経営耕地25ha（地区内15ha）の

水稻、大豆、野菜（ねぎ、中島菜、小菊かぼちゃ等）の栽培、水稻・野菜の育苗、加工品の販売を行い、その売上げは年々伸びている。構成員には30代の若手もおり、地域農業の中核をなしている。

また、今後の高齢農業者の更なるリタイアを見越して、土地持ち非農家を含め出資者を募り、地区内の稲作を担う「仮称：(農)ファームなたうち」の設立を予定している。これまでの県内外の先進地視察から得た知見を参考に、今年度中に組織を立ち上げ、当面は4集落分(45ha)について先行して営農を開始する予定である。将来的には、「みつば会」と「七草会」が行っている農産物加工も同法人に取り込むとともに、稲作は同法人、畑作は上畠農業機械利用組合に特化して、両法人が地域農業を牽引していく構想を描いている。



## ウ 朱鷺の棲む里山づくり

平成22年、朱鷺が再び鉤打に生息できる環境づくりを目的に、「朱鷺の棲む里山鉤打クラブ」を発足させた。同クラブは、金沢大学や石川県立大学の協力を得ながら、昭和30年代に朱鷺が生息していた地区の耕作放棄地を再生しビオトープ作り、朱鷺の餌となる生物や植物の調査などを実施している。また、平成25年には、地区住民の環境への意識を高めるため、地元の中島小学校の児童43名の参加も得て、熊木川上流の水生生物の調査を行った。



## (5) むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

平成の大合併に伴う保育所や小学校の閉校、農協支所の廃止等によって、



古来の固有名詞「鉤打」の名が地域から消え、地区住民は現実の厳しい状況に意気消沈気味であった。こうした中、地域を元気づけるため、協議会では「一声、一汗、みんなで築こう、豊かなふるさと・なたうち（ものづくり、地域自立と、なたうちたんけん・はっけん・ほっとけん）」をスローガンに、以下の取組みを地域ぐるみで実践している。

## ア 「祭り」を通じた一体感の醸成

鉤打地区には、「キリコ祭」や「杵旗祭」の宗教・民俗的な祭りとは別に、地区住民自らが楽しむ催し物として、「鉤打芸能祭」と「鉤打茶屋まつり」がある。「鉤打芸能祭」は、戦後まもなく始まった集落対抗の演芸大会で、一度途絶えたものの、昭和50年頃に復活し、4年に1度開催され、平成25年で11回目を迎えた。また、「鉤打茶屋まつり」は平成6年から始まり、鉤打芸能祭の中間年に、農産物の品評会、即売会や丸太切り競争などのいろいろな催し物を行う。協議会が中心となって開催するこれらの祭りが、地区住民の自主性と積極性を促し、集落の枠を越えた地区全体の一体感を醸成している。



## イ 住民の提案で実現した高齢者福祉

平成20年度に農林水産省の集落機能再編促進事業を活用して、地域づくりの方向性について、外部の有識者を交え、地区住民の間で議論した際、農産物のブランド化や都市との交流の促進といった提案とともに、「昼間に安心して仕事に出かけられるように高齢者向けのサービスを実施してほしい」との声が上がった。これを受け、検討が重ねられた結果、平成22年に地区住民の参画による「NPO法人なたうち福祉会」を設立し、病院等への送迎、買物代行、配食サービス、安否確認サービス（ニコニコ便）などを開始した。更に平成24年度には閉鎖となった保育園を改築して「なたうちニコニコホーム」（小規模多機能介護施設）を開設した。



「なたうちにこにこホーム」は、介護士、調理師、保健師等の資格を持つ12名（9名の女性（施設長も女性））で運営され、21名の地域高齢者が利用している。また、「ニコニコ便」は30～40代女性4名で対応しており、25年度の買物代行の利用者数は約1,100人、安否確認数は約1,100回となっている。ニーズは年



々高まってきており、農産物直売所への商品の搬入代行(軒先集荷)も検討するなど、事業の拡大を図ることとしている。

## ウ グリーン・ツーリズムの展開

協議会は、都市住民や学生等を対象とした農業体験や祭り体験を通じた様々な交流事業を展開している。直近の取組みの一例としては、以下があげられる。

- ・ 金沢大学の4名の学生を2週間インターンシップとして受け入れ、耕作放棄地の実態把握や農作業とキリコ祭りの体験の場の提供(22年度)
- ・ 金沢大学や在京の大学生等の参加の下、夏祭りや秋祭り体験や稲刈りなどの農作業体験からなるツーリズム事業の実施(24、25年度)
- ・ 留学生23名を受け入れ、夏祭り体験、浴衣の着付け、そば打ち体験等の場の提供(25年度)

これらの交流に当たっては、地域農産物の販売につながるように工夫している。



### <事例1>

平成4～6年、在京鉦打郷友会を窓口に関東圏小学生を対象とした「キリコ祭体験ツアー」を開催し、地域の農家が体験指導や民泊をさせたところ、成人後も個人として民泊農家との交流が今も続き、鉦打米や農産物等の宅配便を送るなどのつながりができている。

### <事例2>

平成9年、俳優仲代達矢の演劇堂ロングラン公演を機に来町した都市住民に地区内農家を休憩所として提供。その際、鉦打米を食事に提供してPRしたところ現在まで販売が継続している。

## エ 定住促進プロジェクト

現在、地区内には55棟の空き家があるが、平成24年から市内他地区のアパートに住んでいた新規就農者が協議会の斡旋により地区内の空き家に住み始めたほか、平成25年6月からは金沢大学の女性研究員も住み始めた。協議会では、傷みの小さな5棟の空き家を七尾市の空き家バンクへの登録を家主に働きかけるとともに、申込みがあった際には家主への取次等を行っている。

## 4 最優良とする理由

### (1) 将来を見据えた環境・体制づくり

鉦打地区は、能登半島の中山間地域に位置し、農業生産を行う上で、不利な条件下に置かれている。昭和40年代後半から、林業の衰退とともに、農作業の機械化の進展により、兼業化と人口流出が進行し、農業生産力と地域活力が低下してきたことは、能登地方はもとより全国的な動向と一致している。このような状況の中、昭和50年代から、国の補助事業等を活用した農業生産基盤や農村生活環境基盤の積極的な整備を通じて、地域農業が存続できる環境を確保するとともに、「祭り」をはじめとした地域活動を通じて、地域のきずなを維持してきた。農業・農村を取り巻く環境が更に厳しさを増すことを見据え、これまで30年近くわたって築き上げてきた財産を基に、これからの農業は自らの努力次第ということをも十分認識し、園芸作物の導入や6次産業化により所得の向上を図るとともに、ほ場の大区画と併せ、新たな集落営農組織の設立し、効率的な農業経営に取り組む姿は、全国の同様の条件にあるむらづくりの模範となるものである。

## (2) 自主的かつ内発的なむらづくりの継続

協議会の広範囲かつ継続的な活動は、危機意識を共有した有志による自発的な取組みである。「一声、一汗、みんなで築こう豊かなふるさと・なたうち」のスローガンの下、地区住民の話合いにより知恵を出し合い、伝統野菜や藤瀬の霊水（湧水）、郷土芸能などの恵まれた能登の里山資源を発掘・活用し、住民総動員で行動している。特に、集落ごとに立地や性格が異なる中、その枠を越えて、30年近くにわたり、地区として一体的かつ精力的な活動がなされていることは、旧村という単位であるにせよ、能登地方のみならず県内の他地区と比較すれば、鉦打地区の独自性として、注目に値する。

住民の意見を聞く機会を数多く設け、得られた提案を有識者の意見や他地域の先行事例も参考に、行政からの支援も引き出しながら、すばやく実践に移しており、その分野は、農業、環境、交流、そして福祉にまで及んでいる。「なたうちニコニコホーム」や買物代行、安否確認などの取組みは、本格的な人口減少・高齢化社会を迎える中、女性の力を活用しながら、共助により地域の課題を地域自らが解決しようとする先駆的な取組みであり、この地区のむらづくりにおいて特筆すべきものである。

## (3) 外部を巻き込んだむらづくり

鉦打地区は、「ヨソモノ」を積極的に受け入れてきた。その結果、金沢大学地域連携推進センターとの交流、インターンシップ学生の受入等に

つながり、地域外の視点で地域資源の評価やむらづくりのアドバイスを  
得て、取組みに活かすことができた。また、首都圏の鉦打地区出身者で  
構成される在京鉦打郷友会との定期的な交流は、農産物の安定的な販路  
の確保にもつながっている。外部との交流を定期的かつ継続的に持つこ  
とは、エネルギーを要し、必ずしも容易なことではないが、それに見合  
うだけの得るものがあり、これら交流が更に地域に人を呼び込むこと  
にもつながっていくものと考えられる。

(注：本資料は、農林水産祭むらづくり中央審査会申請書)